
さよならの準備

S H I M A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さよならの準備

【Nコード】

N0170A

【作者名】

SHIMA

【あらすじ】

一ヶ月前、私は彼を亡くした。突然の事故で彼氏を亡くした麻穂。「悲しみの中から自分はいっ抜け出せるのか・・・」生きる力をなくした麻穂が“生きるため”に買ったものとは・・・？ジャンルがなんに入るのかちょっと区別がつかないんですけど、SF恋愛小説？みたいな感じです。少しでも興味がわいたら見てね！！

第一章・晃彦

一ヶ月前、私は彼を亡くした。

それは、とてもよく晴れた日で、晃彦が死んだなんてとても信じられなかった。

それほど、綺麗すぎる空だった。

眩しかった。

バイクで友達の家に向かう途中だった晃彦は、大型トラックと運悪く衝突。病院に着く頃には、もう死んでいた。

晃彦は 救急車の中で 息を ひきとった。

相手のトラックの運転手は、運良くかすり傷程度ですんで無事だった。

まるで、晃彦の運まで使ってしまったような奇跡……。

別に私は、その人を責めようなんてつもりはない。

あれは事故だったのだ。

責める必要なんてどこにもない。

それに、その人だってせつかく死なずにすんだのに責められてはツライ。

なんせ奥さんも、子供もいる身なのだ。

生きてなきゃいけない人だった。

でも、晃彦が死ななきゃいけない理由なんて何処にもなかった。

確かに彼はいつも勝手に、ひとり自由に周りを困らせてたし、

私だって振り回されてばかりだったし……。

顔は“普通の下”って感じだし、私が好きなさわやか系じゃないし、背は高いけど猫背だし、私より年上なのに、いたずら好きでちつと

も大人じゃないし・・・

でも、私はたまらなくあの笑顔が好きで、私の頭をなでるあの手が好きで、

照れると耳たぶ触る癖だとか、顔に似合わず猫好きなどとか、そんなものの全部がなんか愛しくて、彼の全てを愛していた。

「愛してる」なんて一度も言えなかったけど、誰よりも私にとって晃彦は大切な存在だった。

この世で必要な人だった。

何で？何で？何で？何で？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？

ナンデ？ナンデ？ナンデ？ナンデ？

どうして死んじゃったの 晃彦。

晃彦が死んでしばらくは自分でも何をしてたのか分からない。ただ、時が過ぎてこれが夢だということを知れたかった。悪い夢なんだと誰かが言ってくれるのをずっと待ってた。現実だなんて認められなかった。早くこの夢から覚めたかった。晃彦がいないという事実を認められなかった。

早く朝になって・・・毎晩そう思った。夜は孤独を余計に感じてしまう。隣に晃彦がいないことが耐えられない。

早く朝が来ればいいのに・・・

そうやって、眠れない夜が続いた。

第一章・晃彦（後書き）

読んでくださってありがとうございます！感想、批判などありましたらぜひメッセージをどうぞ！m（＿）＿（＿）m

第二章・空つばの生活（前書き）

第二章まで氣にして見に来てくれた方！ありがとうございます（^）
（^）

第二章・空っぽの生活

晃彦がいなくなつて一人になった私を、母は心配して家に帰ってくるよう言つてきた。私はその頃、実家から遠い大学に通つていたため、家を出て一人暮らしをしていた。

「部屋から出る氣力がないの」

そう私が言つと、母は私の部屋に泊まりに来た。私を一人にしたら死ぬんじゃないかと思つていたらしい。

実際・・・もし、あの頃あの家で晃彦と同棲なんてものをしていたら、私は確実に死んでいたと思う。

晃彦の空気を肌で感じながら生きていくなんてきつとできなかった。晃彦のもので溢れた部屋で寝るなんてきつとできなかった。きつと自殺していた。

その時 私は母のために 生きていた。 私は 死ねなかつた。

これ以上母に心配をかけてはいけなと思った。そう考え、動く事はつらかったが、逆に「自分のためではなく誰かのために私は生きている」と思える事は、私を少し楽にさせてくれた。

「夕飯何にする？」

冷蔵庫を覗きながら母が言つ。母がここに来て三日目の夜。

「何でもいい。」

私は本当にどうでもいいというように答えた。

「それが一番困るのよ？」

眉間にしわを寄せて母が言つ。気をきかせてご飯を作ろうとしてるわりには普通な母の態度を見て少しほつとした。

「じゃ・・・カルボナーラ。」

と答えて、その日は母が作った“カルボナーラもどき”を食べた。母が作るオシヤレな食べ物みんな“もどき”になる。

夕食を食べ終わって片付けも終わると、いきなり“夜”が来た。眠るための夜。眠れない夜。

私は晃彦の夢ばかり見た。晃彦が事故にあって死ぬ夢。あの最後の日の夢。私はその場面を実際に見たわけでもないのに、なぜだか夢は日に日に濃く、鮮明なものになっていった。

トラックにはねられる晃彦、その身体がダイヴして地面にたたきつけられる。流れる血、どこから悲鳴が聞こえる。それが他人の声なのか、自分のものなのか分からないまま、目が覚める。

・・・隣には母が寝ていた。思わず母の腕に自分の腕を絡めて抱きつく。せっけんのおいがした。そのにおいを大きくすってから私は腕を離れた。いつまでも母にたよってはいけない。一人で歩かなければ・・・一人で逝った晃彦のためにも。

母が来て一週間が経った夜、私は食器を洗っていた母に突然、「もうダイジョウブだから。」

と言った。テレビを見てるフリをして、おもいきり平静を装って「父さんたちも母さんがいなくて困ってるよ、ご飯とか、家事全般ダメでしょ？あいつら。」

母は手をとめずに「だからアンタはかわいくないのよ。」と言った。

「もつと人をたよっていいのよ？家族なんだし・・・強く見せなくたっていいの。そんなに抱え込んでちゃいつか壊れてしまうわ。」最後のほうは手を止めて、少し悲しそうな顔をして。

―だって、しょうがないじゃない。私は壊れてしまいたいんだよ。

そう口にはださなかったが、かわりに「大丈夫、死なないから。」と答えた。

次の日の朝、無理やり母を追い返した。父と弟がいるあの家に。私の家族が待つあの家に。きつと帰って来てほしいんだろうけど私はまだあの人たちと一緒ににはなれない。

しばらく 一人にして。

母さんがいなくなった部屋はまた冷たくなった。何すればいいんだろう。大学にも行かず私はここでずっと晃彦をひきずったままでいつ抜けだせるんだろう。

そんなことを思っていたら、いきなりケータイが鳴った。

着信画面、“ゆか”

大学の友達からだ。鳴り続ける着信音を切ることも出来ず、重い気持ちで電話に出た。

「はい・・・」

「麻穂？」

すぐにはね返ってきた、久しぶりに聞く由香の声。

「ねえ麻穂、今何してるの？大丈夫？ずっと家にこもってるの？」

受話器の向こうにはきつと、苦しく顔をゆがめた由香がいる。優しい由香。

「晃彦君が死んで辛いのは分かるけど、少しでも大学来てみない？そしたらほら、何ていうかその・・・こんな時に勉強もアレだけどさ、逆に今の麻穂には打ち込めるものが必要なんじゃないかと、思うんだ・・・みんなだっているし・・・。」

かぼそい由香の声。

由香と私は大学で知り合った。同じ学部の友達の一人で、晃彦も一緒に三人で遊びに行ったこともある。そうだ、由香に男を紹介するとか言って晃彦が他の友達を連れてきたこともあった。

「・・・ダメだ。今の私はどうしても晃彦が頭から離れない。」

「ゴメン、まだそんな気にならないんだ。でも、ありがとう。」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

しばらく沈黙が続いたあと、急に由香が

「麻穂、今度の日曜ひま？」

と、きりだしてきた。

「買いたい物があつてさ、誰か一緒に買い物付き合ってくれる人探してたの。ね、一緒に“どつか”いかない？」

と言ってきたのだ。

「買いたい物がある。」というわりには「“どつか”いかない？」なんて言ってる。

――優しい由香。

私のためにわざと自分が行きたいから、って連れ出す口実を作ってる。そんな由香の気持ちにこたえたくて、私はその誘いにOKをだした。それに、外に出る口実ができたことで少しだけ自分がここから抜け出せるような気がしていた。

今度の日曜・・・

久しぶりの外出、友達、買い物。

その時までは、まさか自分があんなものを買うなんて想像もしなかった。

その日、私は闇の中、たったひとつだけそこにあった光を見つけた。

第二章・空つばの生活（後書き）

第三章からようやくこの小説の主体（？）みたいな部分がでてきます。

ので！第三章も見ないと損よゝゝ（笑）
よろしく願います。

第3章・運命（前書き）

すごい執筆をさぼってて、第3章を投稿するのに時間がかかってしまいました。つたないこの小説を見てくださっている方、遅れてしまつてすいません！！

第3章・運命

AM8:30

新着メール

送信者：ゆか

『マホおはよう（＾０＾）／もう起きてる？今日の待ち合わせ1時にTUTAYAでいいかな？買い物して・・・お昼も一緒に食べよう！（＾ー＾）v ゆか』

朝起きると、由香からメールが来ていた。AM9:00。
ボーっとした頭で返信する。

『おはよう。

今起きたよ、11時大丈夫です。

じゃあ また後で。 マホ』

カーテンを開けると外はきれいな青空。窓を開けると風が髪をなでていった。

伸ばした前髪がゆれる。

久しぶりに風が気持ちいいと感じた。

何か、変わるかもしれない・・・

なんて、

ちょっとしたことでもこれからはそう思うようにしよう。と決めた。

朝ごはんをヨーグルトですませて洗濯物をほす。雨にならない事を祈りながら早めに家を出た。

自分で車を運転して行こうと思ったが、気乗りしなくてバスを選ん

だ。

街は今日も多くの人で溢れかえっている。

時間は止まらない。ここは確実に今日という時を刻み続けている。進んでる。

なんか自分だけ置いてきぼりをくらった感じがしてちょっとだけ怖くなった。

でも、今日は私だってちゃんと“動いてる” うん、動けてる。

由香に感謝しなくちゃ・・・

早めに来たはずなのに由香はもう来ていた。

「麻穂！早かったね」

「うん、なんか遅れそうだったから・・・」

「そう、でも思ったより元気そうでちょっと安心した。」

由香が微笑む。

「さーて何処行こっか？」

歩き出した由香の隣を陣取り私は、

「何処でもいいよ。でも由香、買いたい物があつたんじゃないの？」
と言った。

「え？あ、あゝ・・・買いたかった・・・！本があつただけどさ、今見たらなかったんだよね。だから、私も何処でもいいよ。」

「あつ、じゃあ、その本探しに他の本屋見てみようよ。いいよ、どうせだから私つきあうよ？」

私は、動揺している由香に、本を買いに来たわけじゃないことを知りながらちよつといじわるしてみた。

「え？いいいいいよ！そんなんでつきあわせるのなんだし、今日は麻穂が行きたいトコ行こ？うん！そーしよ！」

あわてる由香を横目で見ながら私は思わずふきだした。

『ぶつ、本当は本なんて最初から買ったわけじゃないんですよ？』

ありがと、気使ってくれて。』

くちには出さずにそう感謝した。

「なんで笑ってんの？」

「なんでもない」

そう言つて私達は、特別行くあてもなく街に出た。

服を見たり、靴を見たり、いろんな店を覗いていくと、私達は「科学発明館」という店を見つけた。

「何これ？ここ何ができるか楽しみにしてたのに」

由香が言うには、ここは前から建設中だった建物らしくわりと新しいお店らしい。期待してたのになと不服そうに言った。

「いいじゃん、ちょっと覗いてみようよ。なかなかおもしろいかもよ？」

私はそう言つて店のドアを開けた。

「え？麻穂そんなの興味あつたけ？」

私はその時、自分自身でもなぜそんな所に興味がわいたのか分からなかった。ただの気まぐれだと思ひながらも、何かひつかかるものがあつたのだ。

今思いかえすとそれはやっぱり、何か、めぐり合わせの力というものが働いていたのかもしれない。

店には様々な機械があつて、自動で動く掃除機や、凄い速さで食器を洗い、乾燥までしてくれる食器洗い乾燥機、はたまた本を入れると勝手に朗読してくれる本読み機などがあつた。まあ値段はそれなりに高い物だ。

「ようは、ちよつと進歩した電器用品つてことね？」

商品を見ながら由香が言った。商品にちよつと手が込んで、と言う以外は普通の電気屋さんとなんら変わりはないかった。

しかし少し奥に進むとそこには普段見慣れないものがあつた。

「何コレ、ロボット？・・ね、麻穂！見てよコレ！」

と、由香が手招きした先には映画かなんかに出てきそうな人型のロボットがいた。

「ねえ、コレも売ってるのかな？・・？」

とロボットをぺたぺたとさわりながら言う。

ロボットは子供くらいの背丈のものから、2mはあるだろう大きい物までいろいろな大きさのものがあつた。フィギアみたいにきれいに色がついたロボット達。

「由香、見てコレ・・値段が書いてある。やっぱ売り物みたいよ？」

「へへ、スゴイ。ね、動くのかな？」

「ん？・・あ、動くつばいよ？ほら、『家事お手伝いします。』だつて。」

「本当だ！こっちは『業務用』つて書いてある！・・どんな事するんだろ？」

私達は、「すごい、本当に使えるんだ！科学は進歩したもんだねー」と、二人で言い合つた。

しばらく見ていると、その中に私は多分一番古いであろうロボットを見つけた。他のロボットのようにカラフルでもなければ、細身でもない。ガッチリしたタイプのいかにもロボットという感じだった。大きさは175cmぐらいだろうか？

『オープン記念特別価格！！なんと今ならピッタリ100万円！！』と、でっかく書かれていた。

「えゝ100万！？たっかゝい！！こんなの誰が買うんだって感じじゃん！？」

横から由香が言う。

100万・・・

私は口のなかでその金額をつぶやいていた。

100万円。

心の奥底から何かが響いてくる・・・

「ねえ、麻穂、お腹すかない？そろそろお昼にしようよ」

由香の声にはつと我にかえった私は、「うん」とだけうなずいて店を出た。

由香と入ったイタリア料理の店は、結構評判のいいところで、二人して「おいしい」と言い合ったが、実際のところ私には母の作った“カルボナーラもどき”と味の区別がつかないほどさっきのロボットのことが頭から離れないでいた。なぜそんなに気になってしまふのか自分でも不思議なほどに。

だから、由香に「これから映画でも見て帰る？」と食べ終わって言われた時、つい

「ごめん、用事思い出した・・・行かなきゃいけないところあった。」

と、使い古されたようないいわけを口にしていた。

私の足はかつてに走り出し、まっすぐさっきの店へと向かっていった。

ロボットの価格は100万円。結婚資金に晃彦と二人で貯めていた貯金をくずせば買えないことは、ない。

第3章・運命（後書き）

今回書いてて本当に、私はまだまだ全然ダメだな〜と思ってしまいました。才能ねえな〜・・と（><）でも頑張るっ！！

第四章・出会い

彼女がボクの所に来たのは空の青が眩しいようなよく晴れた日だった。

・・・もつとも、ボクには空が“青い”かどうかなんてこと分かりっこないんだけど。

なんせボクには色を区別するほどの高性能な機能なんかついてるわけないんだから。空が青いなんてのはボクの頭にデータとして入力してあるから分かる事であって、ボクにとって、晴れの日も、曇りの日もたいしてかわりはない。どっちもただ白が少し濁った色をしてるだけだ。

なんで“白”は分かるのかって？僕の目は昔のテレビとおんなじ、白黒だからさ。暗い方が黒で、明るい方が白なんだろう？まあ、晴れの日と曇りの日の違いなんてのは太陽がでるか出てないかで勝手に決めてんだけどね。

ボクはこの店で一番古いロボットだ。

人型ロボットといえば聞こえは近代的でいいが、ボクができたのは人型ロボットが作られるようになった本当に初期の頃で、別に特別凄い機能なんてついていない。今じゃ特別価格100万円！！だ。

まあ、100万で高いといわれてしまっても無理はない。

実際、ボクが売れる日が来るなんてボク自身思いもしなかったのだから。

彼女の名前は「鈴木 麻穂」これはお客様登録の時にうちの店員が入力した名前だ。背はボクより10cmほど低い。世の中には物好きな人がいるもんだな・・・それがボクの正直な感想だった。

自分が売れた！という喜びよりもその考えの方がでかかった。
ボクを買った時彼女はちよつと、「やってしまった・・・」的な表情をしていた。でかい買い物をして、すがすがしくすつきりした！という感じではなく何か、もう後にはひけない、おもいつめた顔をしていた。

——まあ、見たところ金持ちそうでもないし、（なんせ安売りしてるこのボクを買ったくらいだ）そんな顔しても無理はないか。——

彼女の部屋はこじんまりとした部屋で、よく片付けられていた。ボクは今日からここで、お手伝いロボットとして過ごすことになる。

「えーっと、まずは・・・何だコレ、情報入力？と、名前入力・・・名前なら店の人が入れてくれたじゃない！・・・ああロボットに名前をつけるのね。なんかペットみたい。」

などと独り言をいいながら彼女は説明書を読んでいた。

「名前・・・そっか、名前かあ。何がいいかな？何も考えてなかったや。ん・・・。」

なんて、考え込んでいる。

そういえばボクには名前なんてものがなかったんだ。

ふと、そんなことを思った。

「晃彦・・・」

と彼女がつぶやいた。

アキヒコ？まあ悪くはないがあまりにも人間的な名前じゃないか？

「だめ。そんなの・・・だめだよ・・・。」

自分を否定するようにふいに彼女が泣き出した。

「どうしていなくなっちゃったの、晃彦。」

どうやら机に飾ってある写真の男のことらしい。彼氏なんだろう。いや、・・・元カレか。

これだから人間ってのはやつかいな生き物だ。

しばらくして落ち着いた彼女はボクにあらためて『ハチ』と名前をつけた。忠犬ハチ公からとっただけらしい。

――犬かよ！！いくらなんでも、なんてランクの下げようだ！まあ分かれた男の名前を未練たらしくつけられるのもごめんだけど。

そうしてボクの新しい生活が始まった。

第五章・新しい生活（前書き）

第一章と第二章を久々に読み返してみた。ら、自分ってしつこい！
？とってしまった。そう思わせる文面だよアレは・・・（笑）

第五章・新しい生活

家にロボットがやってきた。

買った後、さすがに100万は高かったな。・なんて思ってしまったけど、なんとなく部屋がせまくなったのはいいと思う。一人じゃない気がする。

しかも、私が「ハチ」と呼ぶと、

「ナンデゴザイマシヨウ、ゴシユジンサマ」

なんてふうに戻ってくる。“ご主人様”だなんて、なんかお金持ちになった気分だ。

ここのところ私はこのロボットのおかげで“独り”の時間が減ってきている。もちろん、ハチから特別に私に話しかけたりなんてしないのだけど、ハチは私が独り言をぽつりと言っただけでも反応してくれるのだ。

・・・どうやら、会話と独り言の区別がつかないらしい。私が喋ったことは全て自分に向けられてる命令だと理解しているみたいだ。

例えば私が『お腹すいたな。』と呟くとそれは、『何か作って!』と言う風に聞こえるらしく、『カシコマリマシタ。ユウシヨクハ、ナニガ、ヨロシイデシヨウカ?』なんて言ってくるし、『あ、いい天気。』と何気なく言つと『タダイマ、ホシマスノデ。』と言って洗濯物を干しだすのだ。こういう風にインプットされてるんだらう?

ハチはその大きくて動きにくそうな身体の下にはせかせかとよく働く。

「そんなに働いて疲れないの？」

と私が思わず聞いてしまった時ハチは黙ってた。“疲れる”という感覚が分からなかったのかもしれない。

・・そりゃそうだ。ロボットが疲れるなんてありえない。生身の間じゃないんだから。

死ぬこともないし。

そんなことを考えてたら、昔よく聞いていたCHARAの曲がいきなり頭ん中に流れてきた。

♪ 恋人はもういない 時代はもどらないよね

タイムマシーン は来ない。

そんな歌をうたってた。

どこいったの・・

？

自分の気持ちと何かかぶってて、ちょっと焦ってしまった。

『タイムマシーンは来ない』

ロボットはこんなに進歩して家事をせかせかやってくれるくらいになってるのに、なんでタイムマシーンは誰も作ってくれないの？

晃彦にはどうしても会えない。・・会えない。

そんなことを考えててもきりが無いのに、毎日晃彦の名前を頭の中でリピートしてしまう。

まるで口癖のように。

一度ちょっとふざけて八ちに「晃彦」と呼んでみたけど、なんにも返事はかえってこなかった。
独り言にさえも反応してたくせに・・・

晃彦なんていない。

そう言われた気がして悲しくなった。

——もう片方を探そう。タイ
ムマシーンは来ない

切ない声でCHARAが歌ってる・・・

第五章・新しい生活（後書き）

なぐんかダラダラとすごく長く続きそうな予感です。どうでしょう・・・！

第六章・真実（前書き）

始まってしまった麻穂とロボットの“二人”の生活。人とロボットの違い。．．．それは何なのだろう。

第六章・真実

何なんだこの人は

それがボクの主人（麻穂って人）に対する正直な気持ちだ。

頭が少しおかしいんじゃないだろうか？人間ってのはもつと現実めいた生き物じゃないのか。特に大人ってのはそういうものだとか、ボクは今まで思ってたんだけど。（―そういえばそれもボクにインプットされた情報なのかな・・・）

とにかく、この人は変だ。

急に「疲れないの？」とか聞いてくるし、

「晃彦」と、彼氏だったららしい人物の名前でボクを呼んでみるし。

ボクはただのロボットだ。

ただのお手伝いロボットさ。

電気で動いてるカラダだ。疲れるかって？ばかばかしい。

（疲れるってどんな感じだよ？）

それに元カレの名前で呼ばれても困る。

そっぴの苦手なんだよ。

何なんだ？なぐさめてほしいのか？

ボクはそんなことまでインプットされてない。

ボクがこの家に来て一週間が過ぎた頃“ユカ”という人間が来た。彼女はどうか主人の友達らしい。

突然の訪問に主人は慌てていた。・・・まあ、それは分かる。けど、・・・主人は、ボクのことを隠そうとした。

「ユカ！？どうしたの？いきなり！」

「ちよつと近くまで来たからさ、どうしてるかなと思って・・・麻穂あれからいつこうに大学来ようともしないし。・・・あがっても、い？」

「え、うん。・・・あ、ちよつと待ってて！部屋汚れてるの！ちよつと片付けるからー！」

と言って彼女は“ボクを”片付けた。

「ちよつと待て、ボクはこの部屋の汚れなのか・・・？」

「ごめん、ちよつとの間ココに入ってた！」

彼女は押し込むようにボクを寝室へおいやった。

「出ないでね。」

ピシャンつと勢い良くふすまを閉める。

「すんごい久しぶりに来た！麻穂ん家！」

由香という人物が部屋に入ってきた。

「・・・そうだね、確か由香が最後に来たのアレだ、去年のクリスマス。由香と、タケシと、私と、・・・晃彦の四人でパーティーした時。」

「・・・そつかあ、結構経ってるね。」

「うん。あの頃と今じゃ、もう違うもんね。　　晃彦がいない。」

「麻穂・・・」

「戻りたいよ。」

ふすま越しに聞こえる主人の、小さな部屋を彷徨うように発せらるその声は力ない。

「麻穂、・・・もう、戻れないんだよ。過ぎた日は帰らない。晃彦君だって・・・。死んだ人は帰らない。私達は進まなくちゃいけないんだよ。生きるってことは、そうゆうことだよ。」

その一言でボクは、晃彦という人物がただ、主人のまえから消えたのではなく、完全にこの世から消えてしまったのだと言う事を知った。

同時に彼女の寂しさもボクは知ってしまった。

ボクは彼女が、毎晩深夜に目を覚ましては泣いてるのを知っていたから。

その孤独を・・・知ってしまった。

大切な人を永遠になくしてしまったという
言いようのない寂しさを

知ってしまったんだ。

第六章・真実（後書き）

最近から作者ページに「読者の人数が分かる！」というような画期的！？（笑）なシステムが作られました。

少ないけれど、ちゃんと読んでくださってる人がいるっていうのはやっぱり嬉しいですね〜（^^）

頑張ってサボらずに書き続けたいと思います！！

最終話まで付き合ってもらえると嬉しいです。よろしく願いします（^o^）／

第七章・進む

ロボットって、この世界は何色に見えてんだろ？

――灰色かな。やっぱ。

だとしたら、私とハチ、今きつと同じ世界の中にいる。

由香が家を訪ねてきたのは、雨がぽつぽつ降ってる午後のことだった。

私は突然の訪問に慌ててハチを隠した。

このコがいた店で、あの日さんさん

「こんな高いもの誰が買うの!？」

とかわめいていた由香に

「私がいきました。」

なんて言えない。

それに由香の事だからきつと、私のこと「おかしくなっちゃった」
とか思っただけ心配するに決まってる。

はあ・・・でも、また泣いてしまった。

ロボットなんか買っただけで泣いたとこ見せたらだいなしじゃん。

由香には結局心配かけてばかりだ。

――晃彦は生き返らない。ある日私のもとに晃彦が帰ってくるなんてことはありえない。そんなこと、期待しても仕方ない。

でも、もしかしたら・・・

なんて未だに思っている私は、やっぱり頭がおかしいのかもしれない。

「ハチ、私どうしたらいいのかな。由香には進まなくちゃって言われたけど・・・“進む”ってどうゆうことだろ。」

「・・・・・・・・・・」

やっぱり、ハチにこんなこと言っても答えてくれるはずはない。・・・お喋りロボットとか、いないのかなあ。お悩み相談とかしてくれるやつ。

なんて考えてたら急にハチが口を開いた

「“ススム”のケンサクガ、シュウリヨウイタシマシタ」

・・・は？

「“ススム”トハ、１・マエノハウニススム。２・モクヒヨウ・シンロナドヲサダメテソレヲハジメル。３―」

・・・・・・・・。。

「ふっ」３ あははっ」

私はおもわず笑ってしまった。

「何ソレ!“進む”の意味なんて、自分で調べるところか人に聞い

た事もなかったよ。あんがと。」

やっぱ、お喋りロボットとかじゃなくて、ハチでよかった。

晃彦、私ちゃんと笑えてるよ。

こんなロボットとか買っちゃたりして、変かもしんないけど。

アナタは今、何処にいますか。私のこと見ててくれるの？ ちゃんと傍にいてくれるの？

心配とか、してくれてたりするの？

でも、

でも私にはアナタが見えない。

いくら傍にいたって、心配してくれてたって、ちゃんと、その大きな手で触ってくんなきゃ、感じることもできないのよ？

ねえ・・・晃彦、会いたいよ。

会って話したい。あの世とこの世の境目なんて関係無しに、会いに来てよ。

でなきゃ、アタシ・・・

「泣かないで。」

ふいになにかが私の頭にふれた。

え？

「・・・晃彦？」

そんなことあるはずは・・・でも私は、やっぱりキセキを信じてた。

けれど、振り返るとそこにいたのは

ハチだった。

ハチが私の頭にその動かしにくそうな手をのせている。

「ナカナイデ。」

いつもの機械的な声でそう言った。

ロボットのハチが、私に「泣かないで」って・・・

心なしか、ハチの顔が悲しそうに見えた。

「あ、また泣いてたね。ロボットにまで心配させてどうすんだ、アタシ・・・ははっ」

けど、涙があとからあとから流れて止まらない。

晃彦への思いも止まることはない。

ハチはその後ずっと、黙ったまま私の頭に手をのせていた。

晃彦とは明らかに違う、暖かくもなんともない手なのに、なんか晃彦みたいで、私はそのまま動けずに泣いていた。

後になって説明書を読み返すと、ハチには学習機能というのがついていて、人間とコミュニケーションをとるうちにだんだんと、人間らしくなるらしいかった。

喋り方がきれいな発音になったり、習慣づいた事は言われなくてもやるようになるらしい。

でも、なくさめてくれるなんて・・・？

あれも学習機能のおかげなのかな。

—テレビか何かでそういう場面を見たのかもしれない。

今思うと、あのときの私にとってハチは、既に大切な存在になっていたように思う。

人間でもない、動物でもない、生身じゃない機械、ロボット。

ハチに感情がないからこそ、私は一緒にいて心地よかった。

気をつかわなくてすむ存在。気を使ってもらわなくてすむ安心感。

ハチは私の話を聞いてくれる。ただ聞いてくれる。見当ハズレの答えは私を和ませる唯一の言葉だった。

ハチの値段、100万円。高くなっていなかったよ。

第八章・一番好きな時間

ボクが言うのもおかしいかもしれないが、この生活は妙だ。この生活ってのはつまり、ボク（ロボット）とご主人（マホってゆー人間）との生活の事だ。

最近の料理（というか家事全般。）はほとんどボクの仕事だ。別にボクはそのためにいる身だし、疲れるわけでもないからいいのだが、ご主人にとってコレは本当にいいのだろうか？ますます脱力系になってる気が・・・なんてオモッテル今日この頃。

最近、ボク自身もおかしい気がする。なんだかカンガエゴトと多い。まるで人間みたいだと、自分で思うのだけど、一体なんなんだろう？

ちなみに今日の晩御飯のメニューはご主人のリクエストで“肉じゃが”だ。

ボクは特に迷うこともなく もくもくと肉じゃがを作る。そして、“おいしそう”な肉じゃがができあがった。これで今日もきつとご主人が

「うん、今日もおいしい！やっぱアンタって天才だね！」と言うのだ。

そしてついでに

「しかし、人間のアタシが作るのよりロボットが作った料理のほうがおいしいなんて・・・悲しい世の中だね」

などと、作らせときながらそんな勝手なことを言うのだろう。

・・・・・・「ご主人様、夕食ノ支度が出来マシタ。」

出来立ての肉じゃがと炊きたてのご飯をよそってご主人に差し出す。ついでにみそ汁と、ああお茶も忘れずに。

「あゝおいしそーっ！！ありがとハチ」

「アタシねえ、この時間が一番好き。」

と、ご主人は微笑んで肉じゃがをほおばった。

・・人間ってみんなこの人のように嬉しそうにご飯を食べるのだろうか。本当に幸せそうにボクの肉じゃがを食べる主人を見ると、なんか、そう思った。

しかし、しばらくするとなぜか主人の目から涙が流れていた。この人の涙を見るのはこれで何回目だろう？ 枯れる事のない涙は溢れるだけ溢れて、その後どうなるのだろうか。。。

第八章・一番好きな時間（後書き）

かなり、かなり久しぶりに投稿。ちよつと自分の読み返してみたのですが・・・やばい。思わずつつこみたくなるほどヤバイですね（笑）いや笑い事じゃないんだけど。。あともうちよいで完結する予定！とにかくやるっきゃない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0170a/>

さよならの準備

2010年10月14日18時26分発行